

第4期第9、10回詳報

再建の光と影 間近に

心の復興「置き去り」懸念

311
次世代塾
 伝える／備える

東日本大震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指し、河北新報社などが運営する通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」

第4期は11月、第9回講座を名取市の閑上地区からオンライン中継したほか、仙台市若林区の震災遺構・荒浜小で収録した第10回講座をウェブ配信した。

第9回講座は、名取市の閑上中央町内会長の長沼俊幸さん(58)が講師を務めた。震災前の閑上の光景や暮らしを紹介するとともに、昭和三陸津波(1933年)の教訓を伝える石碑の存在を多くの住民が知らず、「津波は来ない」との過信が広まっていたことを説明した。

震災後6年半を過ぎた市内の愛島東部仮設団地をはじめ、生活再建の歩みを振り返り、被災者ニーズとマッチしない災害救助法や、住宅の二重ローンなどの課題を指摘。公共施設や商業施設が整備され、復興が進む閑上地区の街並みと対照的に、被災者の心の復興が置き去りになることを懸念した。

オンラインでの質疑応答では、仮設住宅でのつらい体験を問われ「1年、2年と年月が過ぎて仮設から出て行く人がいると、残された人たちは置いてきぼりを感じた気持ちになった。特に高齢者の寂しそうな姿を見るのがつらかった」と話した。

「コミュニティ再生に地域外の人が関わる意義については「若い人たちが話を聞いてくれるだけで力になる。震災から10年近くがたち、復興は終わったように思われがちだが、継続して

手伝ってほしい」と期待した。

第10回講座は、荒浜小で案内役を務める仙台市嘱託職員の高山智行さん(37)が震災遺構と地域の復興をテーマに講義。校舎に刻まれ



仮設住宅の暮らしや生活再建の歩み、新しい閑上の街を説明する長沼さん

メモ 311「伝える／備える」次世代塾を運営する推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、仙台大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。

た津波の痕跡や震災発生直後の避難行動のほか、写真や寄せ書きなど教室に残る児童、住民の思い出を紹介した。

震災前、住宅が立ち並んでいた学校周辺は、観光果樹園、スポーツ施設などが

受講生の声

教訓を次世代へ

閑上の人が「津波が来ない町」と思い込み、被害が拡大したのは悲しいこと。地震が起きたら津波に用心することが大切だと再認識しました。教訓を次の世代へ伝えなければなりません。災害で絶対に安全な場所はないと心にとどめて行動します。(東松島市・東北学院大2年・阿部修治さん・20歳)

関わること大事

長沼俊幸さんの話を聞き、住民は閑上を離れた人も戻った人もたくさん事情を抱え、大変な思いをしたことを忘れてはいけないと思いました。大学のボランティアチームの一員として閑上で活動しています。私たちの世代がまちづくりに関わることが大事です。(天童市・尚絅学院大2年・加賀佑香さん・19歳)

